

応援曲 模倣から脱却

白球昔物語 今昔ととも 地域とともに

川越野球部は今年で創部100周年。試合を盛り上げ、選手らを鼓舞してきたのが応援部だ。応援部は今夏、試合で使う応援曲を一新する。「伝統ある川高にふさわしい応援で野球部をより盛り上げた」と応援部OBが思い立ち、現役応援部員と協力した。

川越 伝統の名の下に

上

「川高！川高！」。放課後の校舎屋上から、1く3年30人ほどの応援部員の大



きなコールと太鼓の音が、学校全体に響き渡った。

毎夏、野球部を鼓舞してきた応援部は、試合の重要な局面で使う応援曲をオリジナルに一新し、完成度を高めつつある。「まだ改善が必要」「盛り上がり欠ける」、練習後も反省会を開き、翌日に生かす。



曲の一新は、応援部OBの菅野真二さん(52)が提案した。応援の名門、早稲田大応援部に入り、NTT東日本に勤める今も社会人野球の応援曲を作る。

発端は昨夏の埼玉大会だった。観戦していると、ほとんどが早稲田の応援曲だと気づいた。3年前も同じで「伝統ある川高に『モノ



菅野真二さん

①放課後の校舎の屋上でオリジナルのマーチを練習する川越高応援部②応援部の反省会。オリジナル曲での応援について意見が飛び交った③いずれも川越市郭町2丁目

マネ応援」が定着してしまっているようで、耐えられませんでした」。

応援部顧問に曲の一新を提案すると快諾された。大会後、母校に向いて校舎屋上で「川高の選手は川高の応援曲でないと良い影響が与えられない」「伝統校にふさわしい独自の応援を作り上げよう」と、現役部員に熱く語りかけた。

部員は盛り上がった。昨秋、代替わりしてすぐに菅野さんや吹奏楽部顧問らに曲の提供をお願いした。振り付けや歌詞は自ら考えた原曲をアレンジしたりして、今夏の南埼玉大会はオリジナルだけでやりきれないように曲数をそろえた。

オリジナル曲は、菅野さん作曲の「BLAZING」「Winner川高」、吹奏楽部顧問作曲の「ライティングマーチ」、既存の「ファイティングマーチ」の計4曲。いずれもテンポが良く、好機や一打がほしい場面に演奏し、勢いをつける。菅野さんは「伝統を重視する応援部で一代で3曲も一新するのは珍しい。曲も一新するのは珍しい。勇気がいり、変化を受け入

れてくれたことに同じ応援に携わる者として感謝と敬意を表します。今後、私の曲が淘汰されるくらいに独自の応援曲が増えることを願っています」。



応援部は、野球部の1959年の夏の甲子園出場以来、密な関係を築いてきた。毎冬、県内の応援部が成果を披露するイベントには野球部員が盛り上げに来る。「私の世代にはなかった光景。つながりが年々深くなっているのを感じます」と菅野さん。

2月に新曲を披露した際も、ユニホームを着た野球部員が振り付けを覚え、ともに参加した。応援部の小松将大団長(3年)は「オリジナル曲は、練習時間を削ってまで毎年支えてくれる野球部への恩返しでもある。気持ちを含め、記念の100回の舞台で戦う野球部を盛り上げたい」。野球部の三辻翔主将(同)は「自分たちの力にも、相手へのプレッシャーにもなるので感謝です。応援も武器に頂点を目指します」。